

## 地域における認知症理解への第一歩として

## ◆キーワード

- 1 地域交流
- 2 「祭り」
- 3 認知症理解

「祭り」を通して地域交流から学んだこと

岡山県・玉野市

株式会社アール・ケア グループホーム はるや

発表者：介護福祉士 井上 桃子

いのうえ ももこ

共同研究者：事業部長 鈴木 茂和

所長 原 広美

主任 立花 圭

はるや職員一同

(株)アール・ケア グループホームはるや 平成 14 年  
3 月に開設。平成 24 年 3 月施設老朽化による移設。  
2 ユニット 18 名

理念【幸福に生き、幸福に暮らし、幸福な人生を…】

## (取り組んだ課題・はじめに)

当施設が現在の地区に移設して 4 年が経った。当初は地域との交流や、能動的にどのような施設かをアピールする場が全く持てなかった。そのため、運営推進会議への協力の要請を通じて、地域の方々に当施設を理解していただくことから開始した。その後、継続した取り組みによって徐々に信頼を獲得し、地域住民主催のサロン会やその他の行事にも誘って頂けるようになった。今回、地域の中で認知症ケアの中心的役割を担うグループホームとして、地域の方々と積極的に接点を持ち、当施設への理解を深めて頂くという目的で「祭り」という企画を行った。また、入居者との交流を通じて、地域の方々の認知症そのものに対する一層の理解を期待し取り組んだ成果を報告する。

## (倫理的配慮)

今回の論文や研究発表に際し、入居者、御家族、地域の方々には、写真掲載等についての十分な説明を行い、了承を得ている。

## (具体的な取り組み)

まず、地域の盆踊りやサロン会などに約 3 年間参加する中で、当施設でも「祭り」の開催を考えるようになり、運営推進会議時に伝えた。祭りの開催日程は、地域の行事との調整の上決定した。

次に、当施設が主催する「祭り」であるため、入居者が、可能な限り参加出来るようにと考え、準備段階で協力してもらう内容に、当日のイベント構成の中で手作りが可能な魚釣りと輪投げを選択した。

入居者には、余暇活動の一環および手指の運動と生活の活性化を促すことを目的として、魚釣りの魚のペイント・切抜き、輪投げの輪作り、景品の袋詰めなどを手伝ってもらった。また、入居者それぞれの得意分野を担当してもらうことで、副次的に役割を意識する行動、生活への意欲の向上、それまでに見られなかったコミュニケーションの広がりとその量に変化が生じていった。

次に、開催内容の告知だが、御家族には、祭りの 1 ヶ月前に葉書を送付し、面会時に説明を行った。

早めに周知する事で、御家族の予定を組みやすくした。

地域には、出来る限り多くの方々に参加して頂く為に、当施設の名前に由来した【はるや新聞】を作成し、地域で回覧してもらおうと同時に、約 220 世帯に祭りの案内状と招待券をポスティングし、周知を図った。

## (活動の成果と評価)

準備段階で、あらゆる方面から周知を図っていたこともあってある程度の参加を見込んでいたが、当日は想像をはるかに超える参加人数であった。年齢層の高い方々が中心と考えていたが、意外にも子供連れの家族が非常に多く、想定していたものとは大きく違っていた。しかし、想定外とは言え、日常では触れ合う機会が少ない子供たちを見て、積極的に話しかけたり、普段は表情の変化が少ない方の笑顔が見られたりと得るものも大きかった。また、入居者の御家族が参加し、長い時間を一緒に過ごすことで、施設での日常とは違う入居者の表情が見られた事が印象的であった。さらに、地域の方々に職員の顔や入居者と関わる姿を見て頂くことで、当施設に対する信頼感と、面会の頻度が少ない御家族には、当施設に対する安心感が増したのではないかと考える。

## (今後の課題・考察・まとめ)

今回「祭り」という企画を通して、地域の方々に当施設をより身近に感じて頂けたのではないかと考えている。また、準備を入居者と一緒に取り組むことで、その活動を通し日常的にみられていた不穏が軽減されたケースや、入居者同士のコミュニケーションの向上にも効果があったと考えている。今後も、地域の方々に、認知症に対する理解を深めていただけるよう、このような企画の他、認知症カフェ開催など、様々な形で発信し「地域で認知症を支える」という理念の中核をなすべく施設として歩みを進めて行きたい。